



(目要號二十六百二第)

- 日蓮大聖人と由井正雪先生の日本觀……………松尾 鼓城
- 課題和歌發表……………貴族院議員子爵 清岡長言選
- 軍人精神と日蓮主義……………大僧正 本多 日生
- 侵略的霸道を排し徳化的王道を主張す……………海軍少將 秋山 眞之
- 第四本能 (其一片)……………石田羊一郎
- 優しき心……………海軍造船大監 岩野 直英
- 選擇宗教論……………千葉縣 金坂 教隆
- 僧風の墮落を痛嘆す……………山口縣 朝倉 俊達
- 日蓮主義の感化と活きた軍人精神……………
- 句折伏……………句文句……………(一) 記者
- 悼 不新……………山根 青村
- 日經上人の鐘……………能仁事一師通信……………其他
- 祖師日蓮上人御傳……………(一) 記者
- 統一俳句……………統一圓報……………其他

本誌に關する件は總て東京市小石川區白山前町統一編輯所

振替口座東京三三五三三番

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一冊發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎(印刷人鈴木日雄(郵共八錢))

法華經講義

大僧正 本多 日生著

本書は法華經の教旨を哲學、倫理、宗教等の各方面より解説し以て佛教の眞意を世人に領解せしめんとせしものなり

全二冊

▲洋裝刺繍布上製函入美本

上卷 壹圓八拾錢(壹千頁)

下卷 壹圓八拾錢(壹千頁)

各卷分賣す

●二冊の小包料 内地二十錢、滿洲朝鮮五十錢

●一冊の小包料 臺灣樺太四拾錢

●内地十二錢、滿洲朝鮮四十錢

●樺太臺灣三十錢

●本書は日蓮聖人唱導の根本本義を基標として宗教、教育、哲學、倫理等の各方面に亘りて之を論議し以て世人修養の資に供したるものなり

●大僧正本多 日生著 (第一版二版忽ち賣切三版)

日蓮主義

▲宗教の必要と其撰擇 ▲神儒佛三教と日蓮上人 ▲國民道德と宗教の信仰 ▲破佛論に對する批判 ▲統一的佛教觀 ▲釋尊の出家成道 ▲佛教信仰の體系 ▲法華經壽量品 ▲日蓮主義の梗概 ▲修法次第 ▲方便法 ▲自我偈 ▲自訓 ▲本經祖文要文

●賣り切れざる中に申込あれ

申込所

東京市小石川區白山前町

統一編輯所

振替口座東京三三五三三番

統一事務取扱

東京市小石川區白山前町

統一編輯所

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 一直に御聯想下され候儀に候

京都 三條通鳥丸東入ル町

草木本店

電話 話中七三五番

振替口座東京一五五九番

草木支店

淺草區三好町二番地

電話 話下谷三三四番

振替口座東京二四五六八番

加賀料理 加能亭

東京市日本橋區坂本公園入口

念珠

日蓮各宗本山御用達

京都市 寺町通六角西南角

念珠商 安田商店

二百數十年日蓮各宗の念珠を商ひ來り候老舖に候御信用の上御用願上候

念珠



上圖は別府温泉
の八幡地獄

地獄とは云へども病には
癒しき靈藥泉也



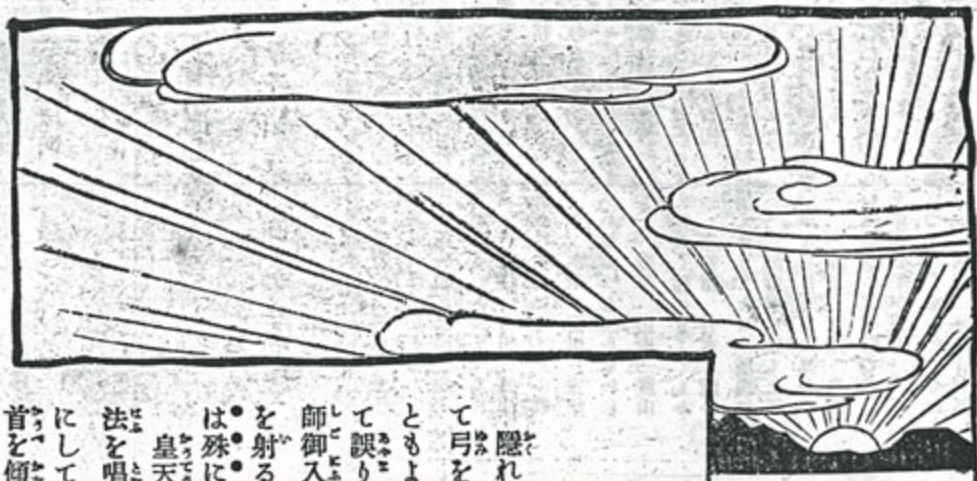
天下の奇勝として
知られたる
耶馬溪の内
青の洞門
現今はトンネルの中を
人の通路とせり

(贈寄氏種繁川安圖二上以)



(日蓮聖人又は各教團開祖等
の舊蹟寫眞の御寄贈を請ふ)

本誌の愛
讀者北海
道神恵内
鐵山事務
所の高橋
幸吉氏が
寄贈のも
の也圖は
國富鐵山
製煉場
眞吹煙の
景也説明
に曰く、
此白き煙
は殆ど硫
黄也、銅
を吹き居
る處嘆々
々々



第三十年十二月號

日蓮大聖人の日本觀
由井正雪先生

隠れたる大勤王家由井正雪先生曰く「西海に、日の丸の扇に對ひて義經が那須與市をし
て弓を引かせしは我邦日の本の起りを知らざる不臣の致し方なり、平家にては軍には勝ふ
ともよも天照をす日天子を表しぬる日の丸には對へまじの謎を猪の武者九郎判官無學にし
て誤り考へて矢的なりとせしはあはれむべく、笑止にこそ」日蓮聖人叫んで曰く「慈覺大
師御入唐以後本師傳教大師に背かせ給ひて、叡山に眞言を弘めんが爲に御祈請ありしに日
を射るに日輪動轉す、と云ふ夢想を御覽して、四百餘年の間諸人は是を吉夢と思へり。日本
は殊に思ひべき夢なり」般の紂王日輪を的にして射るに依つて身亡びたり」正雪先生は
皇天を覆ふ雲を拂はんとして徳川氏の爲に逆賊を以て惡まれ、日蓮聖人は法國一如の大
法を唱へ佛法統一の大幢を擁立して權門俗衆よりあだまらせ給ふ。然るに今世、皇權清明
にして先生の如きも漸く世間より誤を解かれんとし、又聖人に至つては識者之を研究して
首を傾げざるものなし、時なる哉

日蓮大聖人由井正雪先生の日本觀

冬池

河のほとりには
水は静かに流るる
池の水は
清らかなる
冬池の
静けさ
は
心をとらるる
長言

和歌「霜」

子爵清岡長言選

もい歳を越ぬらむ庭の常盤木の葉をましろ
に霜をおきける 名古屋 横爪 光子
ほのくらし朝月開きて見渡せば雪かまつか
今朝の初霜 千葉菊間 横山 逸子
曉の鐘撞かばやとおきみればいらかましろに
霜をおきける 名古屋 有田 麗陽
木枯の風はふきやむ此朝ゆきにもまかふ霜
をおきける 本所 勝田 宣和
木々にさく花と見まかふ葛かつら渡るもおし
き橋の霜みち 淺草 山中 慶山
みそのふの杉のこすえにおく霜のきよくも
ゆるいせの神山 京都市 竹木 蓮一
朝日かけさせは初霜消えゆきてたゞ片屋根に
のこりけるかな 越前 秋葉もよ子
つくはねの縁りの眺いかならむ野邊は眞白に
霜のおきける 越前 秋葉 春淨
初霜になやみけるらむ賤か家の窓に來て鳴く
鶯鶯歌 千葉縣公平 並木 博
咲のこるまききの菊につれなくもいたくもお
ける今朝の霜哉 東金 笠見晋太郎
木枯しの風さえわたるあかつきの村の板橋霜
をおきける 因幡 青木 保

汁のみを今朝摘みとりいてゆけば初霜おけ
りすしるの上に 長生郡 渡邊 乾航
常盤木もうすく粧ひぬ月照ればわきて白くも
見ゆる初霜 越前 山本 繁齋
しもぐもる磯の小雲のさまよひも風ふくま
にすめるつき影 成東 堀江得一郎
ときはなる松のみとりもおく霜にしはは色
をかはらせにけり 千葉縣 並木うめ子
おく霜の今よいしけきそ知られるる鐘の音さ
ゆる野邊のひとつ家 日本橋 窪田 貞二
曉のかね待ちわぶし老か身の手枕さむく霜そ
おきける 越前 森川 茂
つら折る帯の山路の霜ふみて學び舎に往く
兒等のあはれさ 松尾 英
野邊みれば路の芝くさ霜白くかれ葉か末もよ
そふなりけり 新潟縣 藤田 兼園
見るかぎり曉がかり田の稻株におく霜しるき
冬はきにけり 越前 山本 龍雲
おく霜はましるなれともこくうすく紅葉の
しきそめ分けにけり 千葉縣 中村 操
錦かたまかふはかりのもち葉になほ色添ふる
今朝の初霜 京都 下垣 操
身にぬみし夜半の寒さもことほりや雪かたま
かふ今朝の初霜 淺草 山根 日東
冴へ渡る月やおきけん此朝け雲にもまかふ庭
の初霜 伯耆 窪田 純榮
落葉してまよへる山のみちさむくゆけにはは
やき今朝のばつ霜 下谷 小柳 英夫

○佳句

子等はみな白いききをばはきなから霜とけみ
ちをまなひ家にゆく 十二才女 松尾 田鶴
やすかれと國を護りの軍人跡の跡をしもに残
して 大阪市 長尾宿之助
朝毎に詣つる父の墓の上におく霜白く冬は來
にけり 下谷 石丸 秋子
有明の月影きえて松の葉の白く見ゆるは霜に
そありける 下總 釋 南泉
餌をあさる鳥あらはに見ゆる散入江の蘆に霜
白くして 京都 桑原源次郎
きのふまでもみちかりせし山のはに初霜白く
冬は來にけり 遠江 佐原 弘風
なりはひにいそしむ人やわたりけむ霜に跡あ
る門の欄干 下總小見川 星野 重祐
おく霜の雪かたまふわか庭に残るもあはれ
白菊の花 茨城古河 電 日喜
新音をきしめす日の大ゆにははましろに
あさきよせり 大久保 伊藤 延次
○人 播磨 森下 馨
つゝ音ははるかに消えてかり人の靴あと残る
野路の初霜
○地 京都 中野 正甫
八千草のかれし野山に匂ひけり日かけまつ間
のしもの初花
○天 東京 篠崎 芳子
小よふけてひとり物戀ふまどのとに月かけさ
えて霜や置くらし
本誌には選者公用多忙の爲め御筆を願ふいと
まなく依て記者が豫ていただいて居る短冊を
天者に差上げます



軍人精神と日蓮主義

一 序言

【本講は九月十三日、統一閣に於ける乃木大將追悼會の講演要領筆記なり】
唯今は伊豆少將閣下より種々御話がありましたが、少將は日夕乃木將軍に親炙して居られましたので、自分等も傍聴して居りましたが深く感動を興へられ、今更感興を新しく催ふしたのであります。定めし乃木將軍の靈も今日の此の追悼講演會を喜んで御受け下さる事と思ひます。

最早や乃木將軍の國家に貢獻せられた事、又學習院に於て種々御心配になつた事等に付ては申上げる必要を認めませぬと申して別に私は新しき材料を持つて居るてない、今日の講演の配合上此處に登つたのであります。唯少しく乃木將軍の思想の關係に付て申述べて見たいと思ひます。
乃木將軍は晩年學習院長として教育に従事せられました爲

軍人精神と日蓮主義

大僧正 本多 日生

二、乃木將軍の出現の根底

に、思想上の問題は細大となく研究せられたのであります。學習院より出版せられた紀念録に依りますと、種々なる方面に亘つて思想がのびて居ります。即ち大なるは國體の觀念大和民族の根本道徳、細事に至つては日常の事柄、即ち裸體になる事から飯を食ふ事から、風呂に入る事、萬般に亘つて細大漏さず學生に訓戒し、然も言葉で以てするのみならず、身を以て導かれたのであります。右の次第で將軍の思想は如何なりしかは既に天下に知渡つて居りますが、私は別に少しく感じて居る事柄を申して見たいと思ひます。

乃木將軍の如き完全なる人格は一朝一夕の修養に依つて示す事は出来ない。矢張り其基づく所の深き根底がある其根底は即ち確乎たる一つの教であり、自然に乃木將軍が出來たのでない、あれだけの大きな人格を示し大なる感化を興へ

た其原は致してあります、而して其教は何かと申しますと、吉田松陰先生を通じて山鹿素行先生の學風を受けて居られる、誠に正しき意味に於て山鹿流の性行を發揮せられて居るのであります、言葉を変えて言へば、乃木將軍に於て何等新しいものを發見する點はなく、唯其基く所は偉大なる教を、嚴密に正確に守つてそれを實地に現はしたのであります。唯突然と乃木將軍と云ふものゝ人格が現はれて新しく感化を興へたものと思ふとそれは大變に間違ひます。近來西洋の學說や風潮に感化して、民心動搖するに至つた時、之れに對して在來傳つた我が國の偉大なる思想が、更に乃木將軍に現はれ、之れを通じて國民に大なる警告を興へたに外ならぬと思ひます。將軍の愛讀された書物や、松陰先生の書かれたもの、又山鹿先生の書かれたもの等が皆之れを證明して居るのであります。將軍が吉田先生に初めて學問せられた時に士規七則を興へられ、それを寫して實行し、又山鹿先生の武教を熱心に讀まれたのであります。更に自刃せられる數日前將軍は山鹿先生の中朝事實を、今の東宮殿下に捧呈せられました、其最期まで終始一貫山鹿流の學風を慕はれて居つたのであります、思想の關係と申すものは其處に非常な恐ろしいものがある、如何なる偉人も教なくては生じない。又人心の頹廢するも其根源は教の頹廢に外ならぬのであります。我が國の歴史に燦然と光を放つて居る多くの傑士人傑は、悉く教に基いて現はれたのであります。若し教を侮り教を捨てたりとすれば、我が國の歴史は一の見るべきものはないのであります。若し乃木

三、士規七則中の活教

吉田松陰先生の士規七則は極く簡單な簡條書になつて居りますが、其最後の一條が、今日の軍人精神の生粹の意味を現はして居るのであります。軍隊内務書綱領とか野外要務令等では、軍人精神と云ふものを明白に示して居るが、それは松陰先生の書いた士規七則が中心になつて居ると云つても宜い、どう云ふことが書いてあるかと云ふと、倒れて而して後ち已む、斯う云ふ四字がある、是は言簡なれども義廣し、之れを措いては又術なきなりと云ふことが書いてある。武士の精神、武士の精神とは大和民族の模範精神である、大和民族は此の武士の精神を有たなければならぬ。而して此の四文字は無敵に簡單であります、其中に無限の教訓が含まれて居る味ふと生死の問題、即ち命の問題に入らなければならぬ。乃木將軍は自刃せられました、是も倒れて而して後已むと云ふ四文字を實現すべく、命を捨てたものであらうと思ひます。將軍はどうしても軍國に身を捧げずして無事に終ることが出来ないと云ふ精神、是は松陰先生を通じて山鹿先生の思想が流れて居るのであります、將軍の遺書にもあります通り西南役の出來事、及び先帝陛下の崩御が、將軍の死を導いたに相違ないが、唯其事のみに依つて死を決せられたのではない

所謂軍人の精神松陰先生に教えられた武士道の精神、それが將軍の死を導いたのであらうと思ひます。少し諄いやうてあります、其事を證據立つて置きたいと思ひます。

四、決死の教上に立てる盡

忠至誠の一貫

松陰先生の門に入ると先生は懐劍を興へて、汝は直に腹を切れと言はれたさうてあります、しかし學生は學問に來たので腹を切りに來たのでないと云ふであらうが、學問を仕上げた先きは結局腹を切るより外はない。今細い理窟を並べて教へても仕方がない、聖賢の教は、義を見てせざるは勇なきなり、又は命を捨て義を採るものなりとか云ふことである。念この場合は命懸て、正道を守ると云ふことが學問である、細な面倒な事を講釋しても仕方がない、潔く死ねばそれで學問は仕上つたのである。斯う云はれるのである。それはさうでありませうが死ぬ譯に行かない、と言つて弟子にして貰ふにはさうしななければならぬ。元來山鹿流は聖賢の教と武士の遺往勇敢なる精神とを合したもので眞に命懸に君國に盡すと云ふのであります、又吉田先生は劍術にも柔道にも精通されて居られるので、腹を切る眞似はわかる。故に嘘では否ぬ、又やり直ほす、此の位やつたら止めるだらうと思つても止めない。愈々本統にやる其瞬間に於て先生はバツと止める、さうして本統にやらうと決心した者が偉いと云ふことになつた

さうてあります。現に塾に於ても盛んに刀を抜いて劍舞などをやつたと見えて、どの柱も皆三寸四寸と傷が付いて居る、所謂慷慨悲憤の感化を興へたのであります。故に品川彌次郎先生に興へられた書面を見ても、死と云ふことに對して面白い教訓をして居られる。死生の悟が開けぬと云ふは餘り至愚故に命懸て物がやれないと云ふのは餘りに愚なるものであ、日本人でありながら命を的にして事に従ふと云ふ觀念が極らず、何處々々迄も臆病未練で理窟ばかり云ふて居る者程愚なものはない。詳かに云はれれば十七八の死が惜しければ三十の死も惜し、八九十百になりても是で足りたと云ふことなし。十七八の死が惜しければ幾つになつても惜しい、何時でも人間は卑怯未練なものである。人間僅五十年、人生七十古來稀なり、何か腹の癒えるやうな事をやつて死なねば成佛は出来ぬぞ、吾今より當世流に「云々」又「扱ても凡夫の淺猿しさ併恥を知らぬと孔子曰志士仁人有殺身成仁」とか孟子云舎生取義者也とか見氣を叩て大聲をする儒者もある其うるさい事を知らずに一生を送るものもある、見氣を叩いて命を捨て義を採ると云ふやうな、口だけで云ふて居るやうな、そんなうるさい事は言はぬが宜い、斯う云ふて常に眞劍勝負でやらなければならぬと云ふことを言はれて居らるゝ。私は今待合せ中五分間程松陰先生の遺著に就て死に關する問題を調べ見たのであります、盛んに死と云ふことに付て言つて居られる、是は野村和作と云ふ人に送つた書面でありすが、「此道至大餓死諫死縊死皆妙、却つて一生を偷む亦妙一死

實然、然不如、生之更難、事初て悟れり、死ぬると云ふことを一つ聽いて、實はなければならぬ、却て一生を偷むは容易な事でない、一死實に容易であるが、生を偷むの更に難きに如く、人間は死ぬると云ふことは容易であるが、唯譯もなくフラ、して一生を空しく暮らすと云ふことは出来ない事である、苟くも心ある者ならば、空しく一生を送ると云ふことは、命懸て事をするよりもつと出来難い、即ち乃木將軍の最後の観念は是であらうと思ひます。將軍は生を偷んで空しく一生を終はると云ふことは出来ない。是から先き大して國家の御用を達すと云ふことは出来ない、所謂松陰先生の言はれた、生を偷むと云ふことは、死を決するよりも更に難いと云ふことに依つて、乃木將軍は死を決したのであると思ひます、其外未だ澤山あります。是は入江と云ふ人に送られたのである。友人の入江子遠と云ふ人がブツクサ云ふて居るのを評したのであります「子遠々々憤慨する事は止むべし、義脚は命が惜いか、腹がきまらぬか、學問が進んだか、忠孝の心が薄くなつたか、他人の評は何ともあれ、自然とさめた死を求めもせず、死を辭しもせず、獄にあつては獄に出来る事をする獄を出ては出て出来る事をする」社會に在つては社會

○侵略的覇道を排し徳化的王道を主張す

現今の歐洲諸國の狀態は物質文明の極、人生最美の目的思想は是を忘却して、只華美絢爛の風のみ漲り、如何なる事も

海軍少將 秋山眞之

金さへ出せば自由のかなふもの、如く觀念し、金錢の前には餓虎の食を争ふが如き有様にして、従つて貧富の懸隔も甚し

一方には金錢に不自由なきものは王侯の暮しに玉殿錦帳の警も及ばざるものあり、一方には之れに正反對に貧困言語に絶し、とても我國には見る可らざるものあり、又倫道の上に於ても一例せば夫婦の如きも一夫一婦の如き高尚なるはまだしも野合の如き状態にあるもの想像の意外にあり此の最も甚しきものは獨逸にして、而して英吉利佛蘭西の如きも亦意外なるものあり、斯る状態にありて物質的欲求の野望は此に衝突を來して戦争を起すに至る、物質文明の弊害の極悪むべしと云ふべし。

第四本能

石田羊一郎

生物學に從來動物の本能として擧げ來つたものは(一)自己保存、(二)營養、(三)生殖、即ち(一)は自己の生命を守る、(二)は食、(三)は色慾の三つである。生物學者や進化論者は只これ等の三本能のみを認めて居たのである。スペンサーや、ハックスレーや、ヘッケルなども此例に屬する學者であらうと思ふ。然るに近時此三本能の外に一本能を認めて來た。此第四本能は吾人東洋人は別に新らしくも思はぬが、歐洲に於ては全く道徳觀に立つた新らしい本能説でこれに依つて人間の行爲を説明しやうとするもの、やうである。これまた生物學に認めたる三本能の他に一本能しかも人間の生活を説明するには前の三本能にも増して重要な一本能を立つるに至りたるは喜ぶべきことである。

天福自然の幸福を悦びたるものなり、开は我々の祖先が遺跡せるものに於て明にして神社の粗朴清楚なるに見ても是れを知るべし、今彼の壯大なる寺院の建築物を見て、そらるに我精神的建設物の有意味なることを知り了したり。

歐洲を觀覽せし中に、羅馬は勿論の事露西亞等に至りても各寺院は何れも大建築物にして空中に聳え、宗教とは即ち或意味に於て物質文明の誕なるかの觀あり、其他各所に飾れる征伏的記念物即ち凱旋門の如き分取武器陳列の如き何等益なくして害ある保存物を見て感慨なきにあらず、我國の如きも斯るものを神社などに献せるものは取拂ひて然るべきか、由來我國は簡易生活を主とし、清明潔白を以て人生々活の基とし而して

なく徳化的王道を輝かせば可なるべし。又我日蓮主義の佛法王法に關し王法佛法に合する王法不二

○優しき心(二)

(九月五日思恩教林に於て)
海軍造兵 監 岩野直英

又た寶塔品に來て、佛が宇宙的大人格を示現して、而して誰か後世に於て我が法を傳ふる者はないかと、大地の塵に響く程の御聲で呼ばれても我が法と云ふものが何だか分らないから、我等ではあゝそらと直ちに夫れに應じて、によこによこ頭を出す譯には行かぬ、況んや六難九易とあれば、手も足も出せない。提婆品で以て、如何に惡人女人の成佛を説かれても夫れは一つの方便とのみ聞くのである。

勸持品の如く、自ら進んで大法の爲めに、不惜身命の働きをしようとか。或は安樂行品の如く、傳道に關する心得を研究しようとか、云ふやうな事は、全くうつらないのである。以上之を要するに、御説法の中には種々結構が御語が含まれて居たやうであつたが、夫れ等は食物中の鹽、砂糖、脂肪

澱粉の如き普通混物と認められた故に、擧げて申さなかつた、願はくば何處かに味の素が澤山沈澱して居る所を見出したいのであるが、法華經も最早半ばを過ぎる、一日で申せば正午過ぎ、ぐづぐづする内に日も暮れてしまつて有らう。早く妙味に遭遇したいと心もせく所に偶々日蓮上人の「一切經の中に此の壽量品ましまさずは、天に日月の國に大王の山河に珠の、人に神のなからんが如く云々」とあるを見て、兎に角壽量品は少し念りに讀む積りて、湧出品から氣を入れて疑問も充分に藏へて進んで見た。

壽量品になりますと、釋尊汝等當信解如來誠諦之語と恐ろしい嚴肅に御始めになり一同水を打つたやうに静まつて聽して居りますが、要するに、釋尊は無始無終に實在して、衆生濟度の大活動となさるゝ所の本佛であることを、説明せ

らるゝのであります、若し五百塵點劫とか我此土安穩とか、毎自作是念とかを並べ立てられるのみならず、夫れは釋尊の勝手な御談してあつて、御道樂になる分故に不信心の儘で壽量品を通り抜けやうかと思つたが、一つ妙な事がある、其の爲め遂に引き止められた。

夫れは、此の壽量品の文字の大部分が、釋尊の生死なき身にして滅度を示す理由の説明であります、唯釋尊が死去に付て負け惜みの申譯でなく、實に衆生を教化するには死ぬるに限ると仰せらるゝやうに見受けるのであります、此の點に不審を打つて、一考を要すると認めました、茲に其の主なる句を抽出しますと、次の通り長行に於て

のである。

二、處處自説名字、不同年紀、大小亦復現言、當入涅槃。

處處に依ては我れは、色々の名字として壽命も長短あつて世に出てたが、矢張り死ぬる死ぬると言つて説教した。

三、然今非實滅度、而便唱言、當取滅度、如來以是方便、教化衆生、所以者何、若佛久住於世、薄德之人、不種善根、貧窮下賤、貧著五欲、入於憶想、妄見網中、若見如來常在、不滅、便起憍恣、而懷厭怠、不能生於難遭之想、恭敬之心、是故如來以方便説。

馴れて久しくなれば難有味が薄くなり横着心を生ずる、離別せざるを得ずと思へば名残を惜んで遂に優しい心を起す、其所に教を注がんとする爲めに滅度を言ふのである。

四、如來難可得見、斯衆生等聞如是

語、必當生於難遭之想、心懷戀慕、渴仰於佛、便種善根。

もう佛に遭はれぬと知つたならば、必ず戀慕渴仰の心が起さる、夫れが萬善の基となる、

五、若父在者、慈愍我等、能見救護、今者捨我、遠喪他國、自惟孤露、無復待怙、常懷悲感、心遂醒悟。

汝の敬愛する父が旅立ちするときは左程にも感じまいが、其の父が旅先に於て死したとせよ、今まで度々父の教へに従はずして父の心を傷めたる罪を思ひ、且つ頼りを失ひ、悲み悔ゆるなるべし、是れ父の死に依て汝の心を醒悟せしめる譯である、

六、爲衆生故、以方便力、言當滅度、一

佛は自在方便の力がある、其の力で態と汝等の目に見えなくなるのである、此が衆生の爲になるのである、偶頌に於て

七、一心欲見佛、不自惜身命、時我及

衆僧俱出、靈鷲山。

右の如く衆生の爲めを思つて死ぬるのであるが、遭ひたいと思つて一生懸命になるものが出来れば、其の時は我は例の所に出て來るのである遭へないことはない。

八、餘國有衆生、敬恭信樂者、我復於彼中爲説無上法、前と同義

九、因其心戀慕、乃出爲説法、唯は出ない、衆生が我を戀慕する、とあつて、始めて出て來て説法する、

一〇、諸有修功德、柔和質直者、則皆見我身在此、而説法、修養を積み善行を重ねて、優しい心に富んで居るものは、我れ出て行かずとも、彼等が我を見出すことが出来る。

斯様な譯です、長行は悲觀的消極的に偶頌は樂觀的積極的に、説いてある、長行では、遭へない、悲しむ、戀慕す

善根を種ゆとある、偶頌ては、善根ある、偶仰する、遭へる、嬉しい、とある、詮ずる所、戀慕渴仰の心を生じ善根

を啓發せしめんが爲めに、釋尊は生き代り死に代りなされるのである、若しも、衆生が戀慕渴仰せぬならば、釋尊も教へ

の施しやうがなからう、釋尊は、衆生必ず戀慕渴仰して善根を種ゆると、仰せらるゝが、夫れはどうか。(未完)

選擇宗教論

金坂教隆

人何ぞ法華經に來らざる

人世一日も宗教無かる可らず宗教無き人世は闇黒なり人誰れか闇黒を欲せんや、而して宗教に優劣淺深あり須らく選擇せざる可らず。

凡そ人の性は其己れを愛し己れを敬し己れを知るものに悦伏し悦近し、其己れを憎み己れを賤し己れを知らざるものを忌避し遠離するを常とす。特り教法上に於て然らざるを見る、奇觀と云ふ可し。是れ人智の教法選擇に力乏しき所以ならんか、見よや佛教幾多の教法上、吾人の本能を陰覆し其己れを賤し己れを知らざる教法に信順し依頼するもの、多きと、彼の外教の荒唐不稽なる不合理極ま

る教法を奉ずるものを。彼の耶教の如き吾人を罪惡の塊なりと賤しめ、天帝を稱して天父とするも全く其關係を誤まり、吾人と天父と長へに其地位を異にするを云ひて、吾人を奴隸視する教法には、天下文明の魁を以て誇るの人類多く之を奉ず、然れども彼の外人は姑らく恕すべし、吾國民としては佛教の隨他意教たる四十年未顯眞實教に信順するすら吾が皇祖皇宗の國を肇め徳を樹つるの宏圖に戻る思想ならざる無きに、増してや彼の耶教の如き吾國體と大衝突を來たす教法を奉ずるものに於ては沙汰の限に非ずや。若し是を知らずして信ずと云は、愚なり、知れども或る手段の爲めに假面を冠

むると云は、詐偽なり惡むべし、吾國民として彼の教を奉ずるもの此の二種を出でざるか、方今人毎に自尊自重を云ふ、只己惚れの自尊自重にして眞の自尊自重にあらず、眞の自尊自重は法華經に來りて初めて得べし、何を以ての故に前に云へるが如く佛教隨他の教及び彼の耶教等には都べて吾人々類の本性を明かさず、偏へに只吾人を愚弄して教主及び天帝等其れ自身の尊大に誇るのみ。是れ眞理を覆へる教法なるに吾人も又自性に聞きが故に是の愚弄を甘んぜしなり。法華經に來りて此の眞理を顯説し、悉は吾子能爲救護と説いて愛するに一子同仁を以てし、汝等皆行菩薩道當得作佛と説いて吾人の本能を明かし、殘る方なき愛護と敬禮を盡せり、是れ如何なる理由に依るか、一切衆生悉有佛性に依て然るなり。故に本佛世尊は如我等無異を以て本願満足と説けるに、彼の耶教の天父なるものは如

我等有異を以て満足す、是れ天然の道理に違するに非ずや。何を以ての故に、子は終いに父の地位に至るは天然の道理なるに、此關係を誤まり、己れ獨り天父と稱して吾人を奴隸視す、是れ徒らに誇傲尊大なるのみ眞の慈愛の父に非ず、所有財産己れ獨り擅有して子に與ふるに吝なり、如何ぞ父たるの徳あらんや。

我大覺慈父の庫藏諸物を悉皆付與し、速かに父業を續かしむると孰れ。

夫れ如斯、慳貪肌寒むく己れ獨り尊大にして、吾が宗廟の諸神をも一東して奴隸視する自尊他卑の不合理教を何の面目ありてか吾國民の一部に是れを奉ずるものあるや。此の心理狀態を審査するに苦まざるを得ず、佛教の如きも法華經に來らざる以前は天然父子の關係を逸し、一切衆生悉有佛性を隠したれば三界慈父世尊と稱するも、終には誇傲尊大の失に坐すべきに法華經に來りて秘密の奧藏を開き、一切衆生の本性を遺憾なく示し、庫藏諸物を悉皆付與したればこそ、初めて一切衆生の慈父たるの實は顯れたり、愛するに偏黨なく、平等に所有財産を與へ

て、慳貪の失を初めて免れたり、故へに世尊は若以小乗化乃至於一人我則墮慳貪此事爲不可と自白せり、是則ち法華經は吾れを愛し、吾れを敬し、吾れを知るもの第一なるに非ずや、古人も女は己れを知るもの、爲めに容ちつくりし士は己れを知るもの、爲めに死すまて云れしに非ずや、されば示前の教にして賤しめられ、且嫌はれたる舍利弗加葉等の聖旨は此の知己の高恩を無量億劫にも報じがたしと述べられたり。是れを要するに内外諸種の教法に能く吾人の根本地位を知り能く吾人を愛護獎勵して其本性を顯發せしむるに勤むること法華經に越へたるものありや否や。

噫天下智あらん人何ぞ法華經に來らざる。
日蓮上人曰く法華經は我等が心なり法華經を知らざるものは即我身を知らざるなりと、咄。

有感偶成

大阪 山田秀太郎

大鯨離水被制蝶蟻是理、若不得機豐公凡、以掣鯨手常爲素寒堪憫、人間幾微秦否潛、歐洲大亂固有因、思是感情兼貪瞋、上下提醒此心可、心性法華題目眞、眼如豆閻巷腐儒、以寸笈論英雄、愚、善惡元來左右手、人無離虞無憂虞、風強波荒自然至埋、屈屢陋窟自笑吾。

島倉 檢事

爲慶祥斯轉顯輪、總南七里嶺、至今遺德留寒水、醫愈多時苦疾人。七里法華根本靈場本行寺觀音堂、如意庵園南北客、東吟西詠錦繡邊、回頭笑裡醒醒後、一陣瀟風滿目前。竹溪曰 結無限韻致

成島 龍北

晚鐘 勝田 宣和

板戸もる風にめさめて晩の
かねにつくく身をおもふかな

僧風の墮落を痛嘆す

山口縣 朝倉俊達

編輯長貴下
曩に福岡の野に行はせられし大演習の觀兵式に、如何なる風の吹き廻しにや小生縣下僧侶代表者として御陪觀の光榮に浴し申候。

十四日(十一月)夕福岡に着す、旅宿滿客にて大混雜これ等の事は當時新聞紙の報道にて御悉知の事と存候に付略す。十五日午前九時より十一時に至る程しく四ヶ師團の精英を御閱兵分列式の盛況等陪觀仕候、大元帥陛下の御威徳今更の如く崇高に仰がれ感泣せしもの小生一人には無之と存候。

然るところ、小生等と共に陪觀の光榮に浴したる神官僧侶無量三十名、而も其中に正服をまとへる者は神官二名と僧侶にては實に小生一人とは驚くの外無之候見直すとて、苟も神官僧侶が勝手氣儘の正装せるに、不謹慎の態度を曝露せしは徳風の爲め流汗脊を濕し申候。四紐を纏へる、被布をまとへる、甚しきは烏打帽に外套、或る宗の坊主の如き與行もので

も觀るやうな心であつたか望遠鏡を取り出して恐れ多くも陛下を汚し奉らんとする大馬鹿者ありて警官の注意を受けしなど言語道斷の次第に候。彼等僧侶は風儀を理解し居らず、場所を理解し居らず、已れを理解し居らず、品位を理解し居らず、かくて正式の儀式を没却して他の蔑視を受け指笑を被り、而して宗法の尊重をも創傷せんとす、世間より僧風墮落を叫ばる、亦所以あるものと存候。

貴下、現今の僧侶は其正装法服は葬式に用ひ候、年回法要にも用ひ候、而して該陪觀等の如き公の時には用ひるを知らず、否、用ひるを好まず、斯に於て法服が威嚴を失ひ、生氣を失ひ、一個の死服となつて社會上輕蔑を受くるは願れば僧侶自ら之れを招けるものと存候。昔は坊主僧くけりや袈裟までの諺あり、今は自ら法衣の活用を誤つて僧侶の品位を

おとす憫然の至りと存候。貴下、彼れ等陪觀者は縣下より選まれたる代表的人物、而も斯の次第、現代宗教家の價値を疑はる、亦止を得ざる義に候か、小生も餘りの殘念さに久留米、渡潮の講演に叱しを候ぬ、貴下餘白あらは僧風の向上をも叱教されたし、高遠なる幽義の前に僅かなる風儀問題何かせんと思ふ人もあるべきも、儀禮も亦一種の真理也、威嚴品位の失墜は、高遠の幽理を説かんにも耳を掩はしむるに至らば是を如何ともすべけんや。謹んで貴説を聴かばやと存候。敬具。

七頁の秋山少將の論文よりつゞく

の活道は一日も早く現出の要あり、言論は第二也、我國に於ては未だ他國に見ざる眞法王道の契交の理あり、而して之も現實して國民民福を計るべく實行するは吾人畢生の第一の願望なりとす。

面目もなき爪毬幕の秋 米莊
翔隨や一聲鳴けよ日蓮忌 懸雲

日蓮主義の感化と活きた軍人精神

(我統一讀者の書狀)

十一月二十三日神田區今小路の早川竹太郎と云ふ讀者の方から封書が來たから開いて讀むと

「初冬の候に相向ひ益々御勇健 奉賀候、小生日蓮主義御教の感化を受け徵兵合格を第一の忠孝と思念致し日頃合格を念し居候。

念佛へ念願の節言葉には出さずとも心に念すれば神通力にて御加納ましますん、もし言葉に出して念願相かなはずば怨むも凡夫のあさはかさも生ずる故たゞ心の念願なれば□□(二字不明)薄さのみならず、口頭の念願と心の念願との現證が證されまますゆゑ心に重きを置き念願致し候。

日も検査日と相成り、其の結果第一補充兵に引入られ、心の信念は薄きものかと思はれしが、せめて補充より現役に廻されん手綱を頼りに樂み居候と

日蓮主義の感化と活きた軍人精神

ころ、いよく現役兵に繰上げられ、日頃の念願相通じ、忠孝相立ち御教にも相協ひ、心中大に喜び候。

心の信念が第一なる事を體得致し候。軍隊生活の當初は軍用にて他事なせざる由にて折角御送附下さる統一雜誌熟讀の餘暇これなく御心勞の御文字を無になすやうに相成り恐れ入る儀に立入り候へば誠に申しにくき儀に候へ共、當分御會を離れ候へば惡からず御推察下され度御願ひ申上候。

御會を遠ざかるといへども感化致されし信念は増々向上致さんと相勵み、軍隊の爲め、世の爲、益々盡し日蓮門下の名に恥ぢざらんを期し候 早々。

其主意は、先づ感化の禮を通へ、國民の義務心を告白し、次に心の念願を表白し、國民の義務たる徵兵合格に付て一度は落

膽し再び喜びの情を述べ、信念の力に満足を表し、而して軍隊の軍規を重ずる爲にしばしば我「統一」と愛別するを述べ、終りに信念を誓ひ國家の爲に盡すことを宣言して日蓮主義者たるの面目を失墜せざらんことを期して結言したものであつた文字から云へば調つて居ないかしらぬが、其眞情を吐露して贅言なきところ眞に立派な活きた文章である、イヤ活きた文章といふよりも斯う云ふ青年が我統一の讀者にあつて、而して得たる信念を色讀的に事實に現はし居るのを見て、文字の傳道も決してあつて居るべきでないことを感じたのである、其後二十九日雜誌代を拂込み且つ殘額は寄附する由を記してあつたが、其後いかに本誌と二ヶ年の袂別やしまれけん「永々御感化にあづかり候が、いよく入營致しました御禮を申し上げます」と云ふ意味の葉書が着いた、かゝる活きた文字を其儘反古にするに忍びず、此に紹介して我兄弟姉妹に欣んでいたゞきます。斯人實に姓は早川、名は竹太郎、大正三年十一月からの讀者であつたのである。



句折伏……(鼓)

念佛の安賣り、生花のへし曲、茶の手前茶道具茶、俳句の平民

和歌は連歌を生んだ、連歌は俳諧を産んだ、而して俳句は産れた、其兄弟系に俳句の系統は斯れてよいのである。

かねばならぬ。純文學とか詩美的とか謂へばスグと六ケしい言葉を用ひるかといへば左てはな

して、古い、換言すれば舊套な、口古りた、因襲的な、使つて使ひゆるした、又言ひ換へれば所謂宗匠屋が月並式

梅の枝も櫻の枝も同じ型に押し曲て、天人とか何とか彼とか名をつけて、葉蘭なら茗荷の子のやうな入れ方を、えにしだなれば馬の尾のやうな入れ方を、

はねばならぬ。しかし今の俳好連は矢張り何々庵何々宗匠と云へば矢張りエライ者と思ふ、

氣になれぬのである。宗匠は本佛の本旨を忘れて個分的(分利)に執着して宗匠を立てたところに誤つて

悼不新 山根青村

木枯吹き荒む霜月二日、教團の文屋演名劇時に預つ、嚙きに清瀬華城を喪して涙痕未だ乾かざるに、今復古定不新の訃報に接す、哀悼何ぞ堪へん、天地爲めに悲みて陰翳敷日。

因縁斯の如かりしものから、子の統一關報を主宰せし當時、渠と月翠とは子の最も愛撫誘掖を怠らざりし二青年なりき、月翠氣ながらも今猶ほ南越界の一角に綱を負ふて建在なり、而して不新は則ち亡し矣、嗚呼悲哉

芭蕉が句作に就て「物の本情を見定めよ」と云つて居る、宗旨の本情を念佛の元祖は見誤つた、草木の本情を生花師は没却して居る、而して月並屋の俳句連が同じく物の本情を知ることなくして風流を氣取つて居るのは洵にあの氣の毒と云

不新は越前の人、南唐妙正寺上田龍現翁最後の愛弟子なり、想起す明治廿六年の頃、本山大法會の朝、山内本行寺赤羽日輝和尚に伴はれて度牒試験を受くべく登山せる渠は、眞乎可憐の福島沙彌なりき、予錦織菅長の命を受けて、渠を試験すべく讀書修身等一はた

慶し、慶應車夫の集團に繋属する當時の宗門政界に突入し、一敗地に墜れて救國生活より逸し去り、爾來牛込區士族の僑居に單獨雜語を經營して懸念苦悶するもの數年、救國は彼を識せず目するに不徳淺き過つて以て予、予其不遇を憫んで分以上の庇保を興へたり、さればよ葉は恆に予に兄事し、寒暑來往煩る煩繁、その『日蓮上人の研究』を上梓するに當りても不受不施二派管長の題辭は予の辭旋にかゝるものなり。

予の品川妙蓮寺を董せし當時、不新一日來訪頼りに俳句の妙を説き、是非そが研究をと獎語措かず、佛書一冊を分與し去る、當時予は風馬牛なりき、然るに予此日或動機によりて俳句を感ぜし多少の研究を積みつゝあり、今にして思へば葉の分與せし書は高深虚子の俳句論なり、葉と再會の日心行くまで俳句を賞せんと思ひたりしに、突如西風悲報を傳へて幽明處を異にす、嗚呼悲哉。

塵事に倦みて救國生活に復歸せし葉は、濱名湖畔の妙安精舎に在りて憂如自然の風先其宿病を養ひつゝありしに、天年をかきさず可憐雄志を磨らして空しく化を他界に遷す、嗚呼悲哉。

月の十日、統一閣に法縁の長者井村僧正の主催として追善法要あり、予もその案内状を接手しれりしが不幸先約ありて他行せし爲め參會し難はざりしを憾む、遺孀予と共に最も葉を理會せる松尾鼓城、山口四郎の二人者あり、他日何等かの方法もて精神の葉の靈を慰むる所あらん、今はたゞ『日蓮上人の研究』及虚子の俳句を御前に捧げて、處て唱題二百遍、不新大師の増道撰生を祈るものなり兩無。

句文句

俳句の好者には之が多い(これと云ふのは掌を鼻の先にあてて握る事だ、即ち鞍馬のことだ)早苗も亦其一人に外れない。伯耆の孤松子ではないが、私信に

エラソクな事を書て来たで、氣の毒だが原文のまま註つきで載せてをく、それが癪にさはつたら文句を云つて来るがよい(まづ斯うしてをけば、マンざら俳句が逃げもせまい)

統一毎度有りがたく拜見致居候。殊に二十年記念號の表紙、意匠から活字の工合まで大に氣に入り申候。又今後は萬友安川君の寫眞が掲載されること事一入なつかしく存候。

又時に木版の挿畫も嬉しく候。それから過日來俳論の熱の吹き合ひがあつた様に見受け申候得共、お二人共お若いなあ……俳句に付けてはと、イヤに親交くさい思ひが致候。

又今回の影山謙二氏のあれは論文の披露でもするやうに……そして句も成つちや居らぬと憚りながら思はれ申候、影山君の如く掛つた俳句は頭痛が致候、『註』、あれはあれだけの其場かぎりの愛嬌のものとする分はオモシロク讀んだが、あれを掛つたたと讀むやうではマデお若いなあ。忍。

實は小生も彼の俳論に付ては書いて見たい事も有之、筆を採らうかと存候得共それ俳人は大觀すとやらどこまでも茶化して通し度、人は人、自分は自分で……樂天主義の輕いところを諷んでたのしみ度で止めに致候。(註曰、軽く逃げたがおいしいことをした)

日表を鴉の歩く雪の朝 早苗
雪晴のあしたまばゆき眠哉 同
友だちと餅喰ひながら雪見酒 同

日經上人の梵鐘

大供養

▲常樂院日經上人の梵鐘大供養は、豫定の通り、十一月十三日午前十一時より、市内古渡町靈山寺に於て、舉行せり、當日は幸ひ快晴なりしを以て、露店四五十、集まる人員無慮數千人、數百の紅燈籠氣を添へ、無數の萬國旗天高肥馬の秋天に靡りて心地よく、さしにも廣き境内も立錫の餘地なく、餅投げの時の如き、人波打つたる盛況は得も云はれず、實に愉快なりき。殊に管長親下の御説教は、先聖の御法難より、大法の深義を懇説せられ、一天四海皆誦妙法の御宣明は、滿堂善男善女の肺腑に徹し眞に天下一品なりき。次に古鐘撞初式を執行す、途中機橋の中央に於て記念寫眞撮影

一番鐘は、管長親下

中京盛樂連の二秀妓にして、信仰家を以て其名高き副田鏡子掛が、白き腕に滿身の力をこめて撞きにけり、響きれば其妙なる法の音は、清き秋天に響きて、四個格言血涙の鐘三百年來の歴史を語れり次に淑女五六名續て撞信鐘三四十名、何れも衆生覺醒の意見を以て愉快に元氣に撞き、午後五時芽出度終了を告ぐ當日の奉告文並に、教育家大口全三郎君の祝辭左の如し、

奉告文

南無本門壽量之本尊、則シテハ末法相應ノ大師師宗祖日蓮大聖人、宗旨再興

日蓮上人の梵鐘大

養、法道寺移轉入佛供養

南無妙法蓮華經

日什大聖師、不惜身命ノ大師師日蓮上人、知見照覽哀慈納受

圓顯スレバ凡ソ二百五十年前、常樂院日經上人並ニ其五門弟ハ、本門三秘ノ大旗ヲ翻シテ、旗鼓堂々普ク大化導ヲ成シ玉ヒキ、而シテ正保二年當山御創建ト同時ニ、水野太郎左衛門藤原繁政ニ命シテ此四個格言血涙ノ大梵鐘ヲ鑄造シ玉ヘリ、而シテ其鐘撞堂タルヤ種々ナル障礙ノ爲ニ成ラズ、爾來歷代ノ住職幾度カ企劃セラルレトモ何レモ中絶スルノ已ムナキニ至レリ、然ルニ後五百歳遠雷妙道ノ時ニ當ツテ機縁愈々淳熟シ、寺僧ノ協賛忽チ一決、二百五十年來ノ懸案茲ニ解決サレ、九月始メテ起工式ヲ舉ゲ、爾來檀頭大口清次郎、田原善兵衛、總代大矢彦右衛門、櫻井武雄、奥村音彦諸氏ノ盡力ト、其他檀信徒諸氏ノ贊助トニ依リ、今ヤ其竣工ハ告ゲ、境内一美觀ヲ添フルノミナラズ、歴代御哀情ノ一端ヲ達成スルヲ得タリ、尙其地盤ノ堅固ナルコト市内其比ヲ見ズ、年々鐘ルニ從ツテ益々其眞價ヲ發揮セン、鐘ニ曰ク火不能燒水不能漂令自由句内無諸衰患ト、而モ古鐘ノ妙音ハ普ク大千ニ響キ、淨淨水ク萬劫ニ傳ハラン法悅何ゾ是ニ加ヘン、於茲本門本日ヲシテ管長大僧正本多日生親下ヲ臨請シ、並ニ組寺近寺諸賢聖ノ御來臨ヲ乞ヒ、茲ニ落成報告式ヲ修シ、併セテ梵鐘供養ノ大法筵ヲ開ク、仰キ願クハ山門隆興法輪常轉皇國永ニ榮ヘ、檀徒ノ祖先速ニ菩提ヲ證シ、子孫長久家門繁榮ナラシメ、乃至世界周遍利益

祝辭

見佛山靈山寺鐘撞工就リ、茲ニ本日ヲ以テ管長親下ノ御來駕ヲ辱フシ、梵鐘初撞ノ式ヲ行フハ、實ニ本寺並ニ檀徒ノ光榮トシテ欣喜ノ余業スルコト能ハサル所ナリ、抑々本寺ハ常樂院日經上人ノ創設スル所ナルモ、上人ノ護法ノ爲ニ身命ヲ惜マス、時ノ爲政者ノ威武モ思スルコト能ハサリシヲ以テ、アラユル迫害ヲ被リ、其建立ニ係ル寺院ハ概テ破却セラル、ニ至リシカ故ニ、本寺ハ其法日秀上人ヲ開山トシ鐘ニ其災厄ヲ免ル、コトヲ得タリ、故ニ鐘銘中日經上人ノ熱血ヲ止メ、四個格言等宗祖ノ大梵音ヲ鑄出セルヲ以テ、復在上者ノ忠諫ニ觸レ鐘撞ニ上スコトナサレズ、二百四十餘年間空ヲ吞ミテ其墓處ヲ忍受セリ、明治年間ニ至リ一タヒ鐘撞建立ノ企テアリシモ故アリテ果サズ、有田安道師ノ來リテ本寺ニ住スルヤ、弘法布教ノ爲メニ日夜盡心シ、淳熟シ鐘撞ノ機縁一決シ、日ナラシテ其撞工ヲ見ルニ至レシ、惟フニ我帝國々民ハ上ニ一萬世一系ノ聖天子ヲ奉戴シ、一王一佛ノ主義ニ則リ、一天四海ヲシテ皆佛法ニ歸セシムルノ天職ヲ有セリ、即チ島國的ノ眼ヨリ覺メテ東西ノ思想ヲ統一シ、世界文明ノ指導者トナリ、人類救済ノ大理想ヲ實現セサルヘカラス、此時ニ方リテ本寺梵鐘

法道寺移轉入佛供養

當市 瀧川町に廢願せる貧寺法道寺あり、本堂の屋根は傾き壁は落ち墓所に雜草生ひ茂る、維新後五十年間住職らしき僧の住せしを聞かず、近隣の頑童は古狸の棲めりと取沙汰せり、さはれ之とても先師前賢が死身弘法の尊き遺蹟なり、適當に料理せばやと思立ちぬ。

大都市 の日月に發展膨脹する時繁華の巷に散在せる寺院と墓所との運命は如何に移り行くべきぞ、我國現代人の信仰狀態を以てして、墓所に懸れし堂宇伽藍の維持經營は餘程の難事なり郊外に墓所の移る時、跡地の利用に些少の利益を夢みて、漫に改葬移轉を企つるは寺院百年の大計に非ず。

名古屋 には東部人事山に市營の墓地十萬坪あり、市内の散在墓所を遷送せんと企劃さる。

法道寺 法道寺は東部東山村末森城趾(電車より三丁半)に移して名古屋市野本法華宗の共同墓所を經營せんに先師前賢の尊嚴果して如何

新法道寺は風光絶佳、形勝の地に位す、計劃後僅に百五十日にして諸官署一切の手續、大土工一切の工事を完成して、茲に十一月十二日を以て管長親下

の親魂を仰いで入佛供養を舉行せり、此日天氣晴朗、數發の花火を合圖に干に近き老若男女は來集す、莊嚴なりし上棟式、慶典なる入佛供養に佛機を増し佛縁を結びしもの幾人なりしぞ、篠田實の浪花節、竹本染之助の義太夫に住會を祝ぎて黃昏近く大工日雇の木造節を最後に式を閉じ、歸路を急ぐ信男女の頭上に轟く花火の響は、やがて市内某所驅逐の鐵腕下りて各宗寺院の狼狽せん時、獨り中京顯本教團の奏すべき凱歌の聲と思はれたり。

●伊勢靈跡復興

宗祖 日蓮聖人が建長五年の開宗に先立つて伊勢の大廟に百日の間御參籠になり本化開宗及び吾れ日本の柱とならん等の御誓ひの靈跡としての間の山常明寺の事は伊勢の古文書は勿論、統記、年譜、近くは泰常居士の眞實傳で知られて居る。此の常明寺は天台宗に屬し由緒正しく昔は太神宮の御守りの僧侶が住持して居たと云つて居る。現に角法樂を上つて寺であつたのだ。されば恐らくも後陽成帝の勅題(寫眞奉攝)さへある。大聖人は建長五年に茲に參籠されたのである。初の題目石は實に此時に記されたのである。此の境内に阿伽井といふ井戸(今同誓の井と改稱)がある、伊勢名所の井戸であつて水は誠に好い、此井戸こそ大聖人が身を清めたと傳へらるゝものである。然るに維新の時、伊勢は神の都だ佛は置かぬといふやうな論も出て

●大綱佛教婦人會

東京市芝區二本榎一ノ街七

●能仁師の監督布教

上總七里法華 上總七里の間一ヶ寺も他宗を交へない其處の中心を占むる地大綱の信仰の活き死は實に七里法華の活き死を支配するやうにも思はれる。七里法華が眞に活躍したら我全國

●能仁師の監督布教

廣島縣に於ける 中國の重鎮 主義宣傳の飛將軍たる



祖師 日蓮聖人 傳御

▲お子供たちは大きな文字だけ

お読みなさい

(三) 生立 肥立

まるくと肥た、色艶のよい、健康なみ兒善日應は、佛道に深き意味のあります故か、さては又先祖の遺傳か、或は父母の養育の宜しいのか、日にまし智慧づき、父を慕ひ母に還るるより既に愛の心があつて、同じ年ばえの子には二つの物をさい一つを與へ、唯假初に懐抱た人をも長くいとあしみなさる。慈母の



懐を汚さず。乳を吐さず、よく眠り早く眼醒め、泣きいさちらず。實にや慈にも梅檀の二葉、類仰の卵殻といふは此兒のこと、知られます。

善日應は三四歳の頃から世の七八歳の小兒の動靜が有なされたといふ。母の仰をよく聞き、御いたはる心、幼きときより備りて手を扶けて素直に、父の側に事へては黒を摺り。茶をまゐらせ、見るもの不思議に思つて居ます。父の文字書き給ふを見ては何となく文字書くことを覚え、又父母ともに心得ありて寝もの語り、に故事などお譚になれば一度聞いて忘れたまはず、行末いかに賢かるべきとは二人の間にしばしば云ひかはされた言葉でありました。

漁場の子は男女を問はず見やう見似て殺生を意とせないが、應は幼時既に慈悲の心あつく、友だちなどの無益の殺生をもしましめ給ひたさうであります。

貞應二年聖人二歳の時僧道元等入唐す。元仁元年甲申三歳、紀元一八八四年、義時卒し泰時權執とな

る、正月に僧觀覺宗首を開く蒙古人南都露西亞を侵す。嘉祿元年乙酉四歳、大江廣元卒、政子貴、慈鎮、二年丙戌五歳、頼朝將軍に任ず、皇朝國運隆る。貞安元年丁亥六歳、道元宋より歸り曹洞宗を開く、蒙古軍水災を減す。二年戊子七歳、京鎌倉洪水、諸國疫病あり。

▲此に出すは關西日報春風樓主人の筆になれる日蓮記の挿繪の縮寫にして一は、聖人の父重忠旭日を拜する圖、一は時ならぬに蓮華咲き出て見ゆるもの驚ける圖なり。

▲九月登御傳「御母方」の處、下より七行は全部六號字の縮寫にすべきを誤りて五號にしたる也▼

天覽台覽

日蓮聖人 貞觀政要

貞觀政要是古來歴朝の爲政家は皆之を愛讀せり是れ政道の指針、活道の要諦たる所以なれば也。今上陛下亦現に御進講中にあるに承る、以て本書の眞價を知るに足らん。而して本山北山本門寺に聖人の同御親寫を藏す、即ち上表の拔粹三紙と君道、政體の二篇の四十八紙なり。その筆跡は晩年の書風にして兩點を付し間々鎌倉時代の發音をも添へたり、凡そ聖人の高風を讃仰するもの一本を備へざる可らず。詳細なる説



明及び見本は往復ハガキ、又は貳錢郵券御送附次第進呈す。

●甲種 献本同裝記念(金五十折一百頁)
▲定價二十圓の處目下特價十五圓とす
(荷造送費共)▲紙幅縦一尺一寸横七寸
△用紙本草極上等鳥の子紙△表裝鶴丸
特別織金欄表装折本仕立四方金△印刷
玻璃版(原寸大)△容器優美なる桐箱
●乙種(全一帖七十折一百四十頁)▲定價

金十圓、特價八圓(荷造送費送料共)△用紙上等鳥の子紙△印刷七條式寫眞真金版(原寸大)△容器黒塗箱▲右表裝鶴丸織田綴子表装折本仕立天地金

東京市小石川區白山前町一七
申込所 統一編輯所

教學財團基金受領報告

千葉縣白湯村安住寺檀家

金三圓板倉七太郎 金三圓今關莊三郎 金三圓片岡榮三郎
金一圓八十錢宛藤川榮作 藤川藤藏 今關清太郎
金一圓五十錢宛板倉勇太郎 藤川石太郎 金一圓二十錢宛藤川三郎 片岡源三郎 今關留吉 片岡忠太郎 片岡長五郎 藤川萬之助 金九十錢宛藤川源之助 藤川竹松 今關留吉 板倉文藏 板倉吉次郎 片岡長板倉八十八 今關喜三郎 藤川秋造 金六十錢宛藤川淺治 片岡爲吉 片岡文藏 板倉金太郎 今關源藏 板倉仙藏 今關綱五郎 今關三郎 藤川助太郎 片岡留吉 齊藤キク 藤川權四郎 片岡金六郎 藤川勘太郎 金三十錢宛片岡忠吉 藤川仁三郎 片岡長五郎 金二圓藤川國松 金一圓宛藤川武一 片岡由親 藤川榮 片岡助五郎 金二十錢 片岡助五郎

東京品川本光寺檀家

金七圓五十錢金子常吉 金五圓宛宮崎時龜吉 根岸文三郎 金四圓藤田しげ 金一圓宛江川吉五郎 中田寅一郎

●金十五圓也 廣島本照寺 檀家 中分 大橋日鶴 勝田藤吉外十名

圓頓章講演 (紙數百八)

三十餘種の因縁警諭を引て説明せる古師の遺稿、日宗説教の玉手箱

福井縣南條郡南日野村脇本秀香寺
飯田東濟
發行所 振替大阪三二二三一

統一購讀料領收報告(最近領收の分除は一月號に掲載)

- | | | | | | |
|---------------|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|
| ▲金壹圓也 藤崎芳子殿 | ▲金拾四錢也 加藤邦造殿 | ▲金拾四錢也 小出喜平殿 | ▲金拾四錢也 長谷川徳太郎殿 | ▲金拾四錢也 佐藤治兵衛殿 | ▲金拾四錢也 妙蓮寺殿 |
| ▲金拾四錢也 山美重太郎殿 | ▲金拾四錢也 安藤久太郎殿 | ▲金拾四錢也 安藤久太郎殿 | ▲金拾四錢也 大塚金兵衛殿 | ▲金拾四錢也 諏訪進登殿 | ▲金拾四錢也 渡井孫太郎殿 |
| ▲金拾四錢也 武田秀殿 | ▲金拾四錢也 佐藤彦造殿 | ▲金拾四錢也 佐藤彦造殿 | ▲金拾四錢也 川口安太郎殿 | ▲金拾四錢也 石橋貞三殿 | ▲金拾四錢也 板本海亮殿 |
| ▲金拾四錢也 高木熊太郎殿 | ▲金拾四錢也 繁野傳藏殿 | ▲金拾四錢也 繁野傳藏殿 | ▲金拾四錢也 中村榮太郎殿 | ▲金拾四錢也 千葉清殿 | ▲金拾四錢也 倉橋菊太郎殿 |
| ▲金拾四錢也 奥井平作殿 | ▲金拾四錢也 山田良雄殿 | ▲金拾四錢也 山田良雄殿 | ▲金拾四錢也 川端長之助殿 | ▲金拾四錢也 三浦萬之助殿 | ▲金拾四錢也 渡邊勤善殿 |
| ▲金拾四錢也 栗山英智殿 | ▲金拾四錢也 飛浦泰平殿 | ▲金拾四錢也 飛浦泰平殿 | ▲金拾四錢也 鈴木茂藏殿 | ▲金拾四錢也 石井富三郎殿 | ▲金拾四錢也 青木保藏殿 |
| ▲金拾四錢也 市橋彦三殿 | ▲金拾四錢也 高井益三殿 | ▲金拾四錢也 高井益三殿 | ▲金拾四錢也 國見益三殿 | ▲金拾四錢也 羽賀専之助殿 | ▲金拾四錢也 小野田武吉殿 |
| ▲金拾四錢也 清水虎三殿 | ▲金拾四錢也 井上清純殿 | ▲金拾四錢也 井上清純殿 | ▲金拾四錢也 木宮英輝殿 | ▲金拾四錢也 西谷泰生殿 | ▲金拾四錢也 野々村義堂殿 |
| ▲金拾四錢也 木多才吉殿 | ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 根本賴四郎殿 | ▲金拾四錢也 遠藤學信殿 |
| ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 松野日昭殿 |
| ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 鈴木行衛殿 | ▲金拾四錢也 松野日昭殿 |

統一購讀料領收報告

Table listing names and titles of members of the 'Seitokai' (統一閣), such as 山田宇三郎殿, 横山常次殿, etc.

妙 惑 寺殿
▲金四拾五錢也
▲金四拾八錢也
▲金四拾四錢也
▲金四拾三錢也
▲金四拾二錢也

學生の信仰にて本多現下講演、一念三千の妙義開田日城師、日蓮主義熊井本光師。▲十二月三日高木、松尾、木村氏出席聴衆百。

●日蓮主義傳道協會教信 ▲十一月三日東京妙福寺立太子式修後法後講演、舉國一心金坂乾受、▲同日同村東成寺修後法後高真龍師の法語あり

●立太子式講演 同夜明德學園に於て行ふ。
●京都 國轉會 一日本山妙滿寺に於て行ふ。

て、久世眞照、三好信通二師出席。
●護正會 二日本山にて撰時鈔を萩原門前註疏さる。
●立太子式奉祝法要 三日本山にて、國家の基礎の題下に萩原師、外に三好師出席。

院、何れも清水師出席されたり。
●福井縣 十一月三日立太子御式奉祝法要、百八の慶鐘、勉壽萬歳の熱唱。國民精神演義の講演。(國民喜悅の祭秋葉純一師)▲七日は志津村本行寺例會講演あり▲十二日同寺にて例會講演及び月送りにて宗祖御會式を舉行

●大阪 蓮成寺 ○大阪市東區中寺町蓮成寺にては、十一月三日午後一時より立太子式勉壽萬歳奉祝を厳修し、次て左の講話あり。(立太子禮の要旨)堀水日種 ●十一月八日午後一時より宗祖御會式法要を修し左の講話あり(信仰の要義)堀水日種 ●十一月十三日午後七時より日蓮主義講演會を開催す(現代思想と日蓮主義)京藤義應。(日蓮上人の信仰)川崎英照。(本佛の實在)堀水日種。以上

●立太子式講演 同夜明德學園に於て行ふ。
●京都 國轉會 一日本山妙滿寺に於て行ふ。

●立太子式講演 同夜明德學園に於て行ふ。
●京都 國轉會 一日本山妙滿寺に於て行ふ。

●立太子式講演 同夜明德學園に於て行ふ。
●京都 國轉會 一日本山妙滿寺に於て行ふ。

●立太子式講演 同夜明德學園に於て行ふ。
●京都 國轉會 一日本山妙滿寺に於て行ふ。

人の信念を講演する。

山口縣

秋の朝倉俊彦師範へ
ず法輪を贈り居らるゝが、十月六日に
は秋町白銀書林にて、十六日は切山
秋林寺にて、二十日は秋山
秋林寺にて、十一月十日日蓮研究會に
て、宗教五綱論を、七八日御會式執
行、今村俊彦、坂井英俊、朝倉俊彦、現
しき日蓮上人の諸師、十三日、三隔
了性院にて、森田林静、朝倉俊彦、二十
一日妙蓮寺研究會にて、朝倉師、二十四
五日出雲村法華寺にて、今村、坂井、森
田、朝倉の諸師出席されたり。

筑後

久留米本壽寺、渡瀬新興
寺に於ては十一月三日立太子式奉祝會
を修し、中原、出海兩師の御體に關
する講演ありたり。
十一月五日本壽寺に、十一月十二日
新興寺に、同十三日妙蓮寺に會式法要
を修し、中原、出海、吉見諸師の祝教あ
りたり。

今秋福岡市に於て舉行せられたる大
觀兵式に山口縣下各宗を代表して参列
せし朝倉俊彦師は歸途左の如く法鼓を
鳴らされたり。
十一月十七日渡瀬新興寺に於て、(開
會宣言) 出海俊彦師(日蓮主義) 朝倉
師

十一月十九日久留米本壽寺に於て、
(開會之辭) 中原通應師(法華經の兵法
に依れ)三浦源次郎君(慈悲)古賀仁三
郎君(日蓮主義處世觀)朝倉師。
十一月二十日同寺に於て(予の信仰)
橋本守太郎君(三力相應)三浦君(分を
守れ)和田三郎君(日蓮主義處世觀)朝

倉俊彦師。

朝倉師は先づ日蓮主義によりて人格の
完成と理想文明の建設を期すべし所以
を説き現代思潮の缺陷を擧げ來りて、日
蓮主義の要求を示し處世の指針、活動
の源泉、忠孝の歸結、等詳細に明快に
適切に講述せられ聴衆をして感ましめ
ず多大の法益を興へられたり。

名古屋

立太子禮奉祝
大講演會 十一月十一日夜常樂寺に
於て中京國本教團主催の下に舉行、管
長現下の御祝教を仰ぐ、來會者滿堂
佛敎に關はれたる護國の思想 現下
業員の爲に現下一席の御法話あり。

名古屋活動教報 十一月一日午後
六時より、市内古渡町靈山寺に於て、
立太子禮奉祝講演會を開催す(腐敗せ
る青年)川崎桂治師(立太子禮の要旨)
日比(建國の精神)森基平(建國の青年)
酒井忠造(國民的自覺)草功信榮(世界
統一)有田安道(軍隊教育の方針)第三
師團派遣港口正芳。各氏至誠熱辯を揮
ひ、大に國民精神を振起し一時萬歳を
三唱して閉會す。

十一月七日午後六時より、市外緒川越
境寺に於て、宗祖御會式法要 慶後後講
演(奮起せよ大正の國民)有田安道(感
字)長谷川日清。參聽者約五百滿堂の盛
況を呈す、尙唱題の大鼓勇ましく、通夜
せし信者多数ありしが、夜半名物「イ
モガイ」の饗應ありき。

本化聖典大辭林

第二分冊出づ

第一分冊の出るや、之れを讀くもの或は
曰く精力の權化也、或は曰く熱誠の所
生也、或は曰く聖賢講究の結了也と様
々の讃辭を受けたる本化聖典大辭林は
今亦第二分冊の發行を見たり、これほ
どの事業を完成するは萬思なる 信念の
結晶にらざるは豈能く之れを買取せん
や、多少發行時日の遅延の如き同ふと
ころにあらざる、吾等はその全部の完成が
邪寛なくして漸次遂行され、而して本
化道の炬火たるべく熱望するもの也
(正價壹圓二十錢、静岡縣清水港三保最
勝閣内師子王文庫、振替口座東京六六
七番)

帝大澗治會

東京帝國大學
内日蓮聖人御對澗治會は今一回左の楫
を發したり、尙入會申込は未記)
正法を立て、國を安んじ、神國の
使命を全うして一天四海の同胞を
導き、先づ此國に寂光の寶刹を築
かんとして久遠の本師釋迦世界の
教勅を披り、日本の柱、日本の眼
目、日本の大船、聖日蓮は來れり。
一切衆生の盲目を開き、一切衆生
の罪障を治し、一切衆生をして長
夜の眼より蘇らしめんが爲に、聖
日蓮は來れり。

予輩同人少量たりと雖も聖日蓮の
流を汲む、些か此志願に賛し此苦
衷に感ずる者也。願くは法雨等し
く一切に潤き普く實踐上下に洽は
んことを。依て茲に澗治會を設け、
日蓮聖人の實義を究め佛祖の教勅

香川縣の日蓮主義

高松市小宮正方氏方に事務所を設ける
日蓮主義研究會は本年一月
山下徳太郎 小川 岩次郎 小林和三郎
山上伸太郎 小川 良正 北岡武三郎
岡内徳次郎 樽川 正吉 遠藤高之丞
下山 鶴一 若部榮太郎 田村龜四郎
鶴川芳太郎の諸氏發起人となりて設
立し其後講演會を開き或は文庫を開き
種々盡力の結果益々有力のものとなり
つゝありと目下幹事は田村龜四郎、孤
堂橋村正吉、鶴川芳太郎、藤村下山龜
一の四氏なり。

嵐雪會

(俳句好者の
一讀を冀ふ)

統一編輯所になつて居る常檢寺に雪中庵
嵐雪夫妻の墓があります。嵐雪は其角と
駢ひ稱して蕉門の二賢と稱せられて居りま
す。嵐雪は寶永四年十月十三日(本年二
百十年目)に歿し、妻は之より八年前永
祿十二年九月三日に歿して居られます
本年は俳句好の私が此寺に住つた爲に嵐
雪忌を催し本誌上でも課題を發表致しま
した。それが二百十年忌とは偶然のやう
で意味があるかも知れません。それはさ
て此嵐雪の墓も早晚改葬の運命を持つて
居ります。此際嵐雪會を起し永久的に
之を保存する方法を講じたいと思ひま
す。即ち雅味を有つた適當の地を選んで
之を移し樹木を植えて景情を添へ此の俳
聖の靈を永へになぐさめたいと思ひます
就ては同好の諸兄弟姉の賛成を得たいの
であります。何れ個條書やうのものは發表
しますが、それまでに何れにしても御賛
成下さる方は葉書でも御通知を下ささい
發起人 松尾 敏 城

和歌 寄稿家諸君に告

本誌に掲載したる和歌及俳句を本年一月
分より十二月のものを一輯し小冊本とな
して發行したし、寄稿家三十人以上の賛
成を得ば實行すべし。但し誤れるを正し
俳句は更に吟味すべし。
(一)賛成者は一冊三十錢として二冊以

日宗法衣專門 青雲帽 青雲帽 法衣 法衣 飯田法衣店

京都市佛具屋五北條
振替口座大阪大座口七四八

上買受承諾のこと
(一)賛成者は本年中に申込みありたし
(二)申込人は本名住所を正確の文
字にて記入されたい。但し巻末に本名
等記入を好まぬ方は其旨豫め申添へ
をかれたし
(三)賛成者は只賛成と部数の通知だけ
にてよろし代金は製本の後にてよろ
し、何となれば人数充たぬときは發
行は中止す返金の手數面倒なれば也
申込所 東京小石川白山前町 統一編輯所

位牌木魚卸小賣

御來店之節ハ陳列場へ
御來車被下度は迄トハ
一層勉強仕り
佛具一切陳列仕置候



各本山御用達
佛像佛具
一切卸小賣

三法堂佛具陳列場

定價表郵税四錢
小賣部 京都三條小橋東入南側
卸部 京都市三條通小橋西入
本舖 三法堂 藤田總治

文學博士 姉崎正治君著

法華經行者日蓮

菊判布上製函入美本筆蹟
コロタイプ寫眞十五枚
大判地圖本文六百餘頁
眞筆挿圖進化地圖等挿入
正價二圓三十錢 小包料十四錢

圓満の人格、血涙の一生、熱火の信仰、深遠の理想、描き來つて史論あり、記傳あり、哲學あり、宗教あり、懺悔の告白と救世の使命と、憂國の警策と感應の法樂と、奮戦の叫びと信仰の凱歌と、參差照應の壯觀、古今に冠絶す。

忠實に上人の遺文に基き、佛敎史、宗敎學、宗敎心理の通義に照らして「法華經行者」の一生を活現す。是れ二十世紀の新法華經也。著者研鑽十五年、「法華經行者」を世界に公表すると同時に、之を日本の公衆に薦む。

東京市小石川白山前町

取次 統一編輯所

振替口座東京三三五三三番

堀文學士著
美術上の釋迦 正價壹圓貳拾錢
送料拾貳錢

日蓮聖人御遺文

皮表裝、上下金押
正價貳圓 内地送料拾貳錢

本多日生師著
聖語錄

四版 壹圓(郵稅八錢)
四版 特製壹圓參拾錢

縮冊法華經

再版 貳拾八錢 郵稅六錢
(印刷値上に付)

調 妙法蓮華經開結

一冊五拾錢 特別壹圓 郵稅六錢
和譯、總ふりがな付なり

本多日生師著
軍人精神 代價郵稅共
金四拾壹錢

本多日生師著
壽量品講義 代價郵稅共
金五拾錢

本多日生師著
釋尊の八相成道 一冊郵稅共
拾貳錢(小冊)

本多日生師著
破佛論を辯ず 一冊郵稅共
金七錢(小冊)

大僧正本多日生上人題字
大僧正嶼村日正上人講述
日蓮上人之本尊 定價七拾五錢
郵稅八錢

統合大講習會講演集
定價壹圓五拾錢 郵稅拾貳錢

開目抄 (縮冊)
一冊郵稅共拾貳錢

小橋昭了著
法華經大要講義 一冊郵稅共特價七十八錢

松尾鼓城 小林鷲洲著
投入と盛花 驚くなかれ
忽ち八版 代郵稅共壹圓

東京市小石川區白山前町
賣捌 統一編輯所
振替口座三三五三三番

●書冊問合せは往復ハガキに限る●

統一編輯所

統一課題發表同人 俳句「霜」並に「霜柱」

○印は款句◎印は佳句

○掲灯に犬の子慕ふ霜夜哉 鶴園
◎評 晝題などにある古い想だが佳句は矢張り佳句

◎千人のつばの背や霜白し 風陽
◎評 千人に於て活く百人も悪しく萬人もあし

◎土黒き路の崩れや霜柱 笑翁
◎評 着想奇にして峻

◎時を待つ勇士か霜の衰冠 笑翁
◎評 着想奇にして峻

◎霜柱の火に暖まる乞食の児 惟泡
◎評 此れれ〜つきまるとふ

初霜に驚く菊の主人哉 秋山
◎評 露ならばと思ふ

◎餅搗に他人交らず十五人 龍北
◎評 天來想

◎庭先やリボンは紅し霜解ぬ 直水
◎評 霜に於て初めて感想あり、若雪ならば失敗なり

◎子も孫も起き揃ひけり餅の音 三田村
◎評 今朝一人行商の行く霜の路

◎水車小村一番の強き霜 秋月
◎評 雪ならばと思ふ

◎まゝ事の忘れ建や今朝の霜 親父江

一敎家亦有風流
一以通言語自然
一無邪たるべし
一ブルとガル禁
一句面理窟を禁

◎評 此の霜に於て初めて今朝の語は利くなり、可愛き殘景を捉え得て充分なり

◎餅搗や一吐出す村夫子 壽山
◎評 餅搗いたあと靜なる思ひ哉

◎添乳つゝ餅搗の音を聞く夜哉 照江
◎評 三更の月湖にあり霜氷る

◎大蛇代る銀に聲ある霜夜哉 同
◎評 漢詩を讀むが心地す

◎餅搗や長家五軒の最合白 同
◎評 餅搗や小橋を踏みて水車水屋

◎座蒲團は母の席なり餅搗夜 芳子
◎評 餅搗きや嫁きし妹の噂哉

◎はつとつく息や霜夜の銀火鉢 同
◎評 縫物にうみてや、さては外に思ひのあまりてか、きかまほし。

◎又顔か人妻か、それ等を考ふるも趣味深し

◎風そよりなき夜や霜のをき初め慶山
◎評 餅搗や長者が家のはねつるべ

◎小便のいたづらもあり霜の路愚狂
◎評 餅ついた白かづ憶る子供哉

◎餅ついた白かづ憶る子供哉 同
◎評 口とがらして誇り語るさま見ゆ

◎朝霜や流行地蔵に錢五文 雀子
◎評 大原女のいたゞ花や霜の朝

◎初霜や干して忘れし下駄の上 不二子
◎評 餅つきや大根おろし酒五合

◎置霜に梅花印し去る椽の下 同
◎評 餅搗や涙土唄いて詩を吟ず

◎餅搗や無役は乳母とや、ばかり 同

夜雪庵宗匠選

○霜白し御堂の屋根に鳩一羽 瑞樹
○霜毎に變る野山の景色かな 翠山
○寂として露に影引く歩哨かな 同
○土氣振や恩賜の餅を搗替所 勉之
○そつと置く物にも音の霜夜哉 同
○大砲の音にこけけり霜柱 同
○霜を踏む草履の跡に虫遣へり 同

○餅搗の力に勝てぬ角力哉 同
○忘れたる利鏝鏡し草の霜 同
○霜消えて行くころ三里千鳥哉 同
○馬の息三尺白し霜の橋 同
○霜寒し海賊船に人黒き 同
○流し木の寄る橋や今朝の霜 同

○袖浦會第十一回俳句

○秀逸

○風吹き切りやせむ瀧の糸 眞
○氣短かな人の往來や年の暮 眞
○寝み上りし米の俵や年の暮 眞
○強ひられて餅の味知る書生哉 眞
○寒菊の霜にもめけぬ香り哉 眞
○寒菊の霜に文習ふ寺男 眞
○村納の地見やく頭巾哉 眞
○霜柱の新しいく頭巾哉 眞

○木枯の中や息する破軍星 眞
○寒菊や浮世の塵を外に吹く 眞
○七難を包む乙女の頭巾かな 眞
○月花の世を忘れてや飯と汁 眞
○大回課題 天莊夢 眞
○各題二句吟 月野 眞
○千葉縣演野 輪浦 眞

次號(同人)「紙鷲」(たこ、風、いかのぼり)「芹」(せ、結切は)投稿規定

用紙(書)一題一人(他用書)隨意(方)三句限り(を禁ず)

宛 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

●東郷元帥 ●石井前外相 ●花房子爵 ●小笠原子爵 ●石橋
 田大審院長 ●故上村大將 ●八代中將 ●川島中將 ●石橋
 中將 ●宮岡中將 ●松本少將 ●佐藤中將 ●島中將 ●石橋
 橋少將 ●細野大佐 ●杉村大佐 ●木内京都府知事 ●大
 會松太郎 ●森谷眞男 ●野添宗三 ●鈴木宗言 ●犬養
 毅 ●佐々木照山 ●伊東知也 ●矢野茂 ●以上自我傷
 筆文學博士三宅雪嶺序文

法華經講義

全二冊

▲洋裝菊版總布上製函入美本
 上卷 壹圓八拾錢(壹千頁)
 下卷 壹圓八拾錢(壹千頁)

●各卷分賣
 ●二冊の小包料 内地二十錢、滿洲朝鮮五十錢
 (臺灣樺太四拾錢)
 ●一冊の小包料 内地十二錢、滿洲朝鮮四十錢
 (樺太臺灣三十錢)

大價正 本多日生著

日蓮主義

三五判洋裝金文字入▲天金縁
 函入美本▲紙數六百二十餘頁
 ▲定價九拾五錢 郵稅六錢

▲宗教の必要と其撰擇 ▲神佛三教と日蓮上人 ▲國民
 道徳と宗教の信仰 ▲破佛論に對する批判 ▲統一的佛教
 觀 ▲釋尊の出家成道 ▲佛教信仰の體系 ▲法華經諸品
 ▲日蓮主義の梗概 ▲修法次第 ▲方便法 ▲自我傷 ▲自訓
 ▲本統經文要文

賣り切れざる中に申込おれ

東京市小石川區白山前町
 統 一編輯所
 振替口座東京三三三三三番

申込所

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
 大正五年十二月十五日發行(毎月一回十五日發行) 統一事務取扱

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 直に御聯想下
 京都 三條通烏丸東入ル町

草木 本本店
 電話 話中七三五番
 振替口座東一五五九番

草木 支店
 電話 話下谷三四三四番
 振替口座東二四五六八番

淺草區三好町二番地
 振替口座東二四五六八番

前々號 田安は安田の誤り

念珠

日蓮各宗本山御用達

京都市 寺町通六角西南角
 念珠商 安田商店

二百數十年日蓮各宗の念珠を商
 ひ來り候老舖に候御信用の上御
 用命願上候

念珠

辻井佛師御案内

●荷も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●
 佛像佛具 調度所
 宮殿幢天蓋其一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
 總本山身延山
 總本山妙満寺
 大本山本願寺
 日宗各教團

京都寺町四條南大雲院前
 舊名「乾清」事
 大佛師 辻井岩次郎
 振替大阪八一五七番
 電話 話下三二五八番

●御用仰せ被下候は、叮嚀深切を旨と致候●
 多少に限らず御
 用奉願上候也

●念珠ならば小野嘉助店へ●
 ▲日蓮各宗本山御用達
 ▲顯本總本山妙満寺御用達

弊店の特色は實用を旨とし従來
 調進仕り候へば多少に不拘御用
 命願上候

市都市寺町通蛸薬師下ル
 念珠商 小野嘉助
 振替口座一九七三〇番

統 一編輯所

東京市小石川區白山前町

▲本誌事務取扱所 東京市小石川區白山前町統一事務取扱所 本誌定價一冊
 發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行所 松尾英四郎△印刷人鈴木日雄 郵稅共八錢▽